

〈研究論文〉

## 実技を通じた日本文化理解と語学学習の相乗効果を目指して —日本舞踊科目におけるCLILの実践的取り組み—

本 城 美和子

### 【要旨】

本研究は、日本舞踊を用いた実技科目にCLIL（内容言語統合型学習）の視点を導入し、文化理解と日本語学習の相乗効果を検証した実践的研究である。対象は留学生別科で日本語を学ぶ留学生10名であり、内容、言語知識・言語使用、思考、協学・文化理解の4つのCを基にして授業デザインをした。アンケート結果からは、語彙や表現の習得、思考力の向上、コミュニケーション力と異文化理解の深化が確認され、学習者は体験を通じて日本文化への理解を深め、日本語の運用能力も向上させていたことがわかった。今回の取り組みにより、CLILの教育理論が実技科目においても有効に機能することが明らかになり、本稿は文化体験型学習を通じた日本語教育の新しい可能性を示すものである。

キーワード：実技科目とCLIL、日本舞踊、内容言語統合型学習、体験学習、異文化理解

### 1. はじめに

グローバル化が加速度的に進むなか、言語教育には単なる言語知識の習得を超え、異文化理解能力や協働的なコミュニケーション能力の育成が求められている。文部科学省は「日本人学生の海外留学状況」及び「外国人留學生の在籍状況調査」<sup>1</sup>において、(独)日本学生支援機構実施の「外国人留學生在籍状況調査」を公表しており、それによると2024(令和6)年5月1日時点での外国人留學生数は336,708人(対前年度比57,434人(20.6%)増)と過去最高となっている。このようななか、日本語教育においては、学習者が日本語学習を通して日本社会や文化への理解を深めることが重要視されている。とりわけ多文化社会の進展に伴い、細川(2008)が、言語教育における「相互文化性」を提唱し、ことばと文化の不可分性を強調して久しい。しかしながら、奥野(2018)によると、従来の日本語教育は文法や語彙の習得を中心とした「言語形式の学習」に偏る傾向があり、文化的背景や価値観を身体的・感覚的に理解する機会には必ずしも十分ではない。実際に、日本語教育現場において実技科目や身体活動を通して文化を体験的に学ぶ機会は限定的である。

一方、教育現場では「体験的学習」や「統合的学習」の重要性が強調されており、言語教育

と内容学習を統合する教育モデルとしてCLIL（Content and Language Integrated Learning：内容言語統合型学習）が注目されている。日本語教育の分野においても導入が進んでいる。また、実技科目を通じた体験的学習が持つ「身体性」や「感覚的理解」は、文化理解に有効である。特に伝統的な日本文化は言語的説明だけでは十分に理解されにくい面も多い。しかし、日本語教育分野において、体験的学習は副次的な位置づけであったり、単発的なイベントであったりすることが多く、体系的に授業に取り入れられた報告は少ない。さらに語学学習と結び付けられた研究に関しては、管見の限り見当たらない。

そこで、本研究では実技科目として日本舞踊を取り上げ、そこにCLILの視点を導入し、語学学習と文化理解を統合的に促進する教育モデルの可能性を検討する。このような統合的な教育実践を検証することは、CLILの適用範囲と可能性を広げると同時に、日本語教育の新しい学習モデルの可能性を示すものになると考える。

## 2. 先行研究と本研究の目的と意義

### 2.1 理論的背景と先行研究

#### 2.1.1 CLILと言語教育

まず、CLIL（Content and Language Integrated Learning）は、1990年代以降ヨーロッパを中心に発展してきた教育アプローチであり、Coyle, Hood & Marsh（2010）は、CLILの構成要素として「4つのC（Content, Communication, Cognition, Culture）」を提示し、単なる言語の学習に留まらず、思考力や異文化理解の育成を重視する教育の枠組みであると論じている。日本においても2010年代以降、日本語教育の分野で導入の動きが見られ、日本語では、「クリル」あるいは「内容言語統合型学習」と呼ばれ、定着しつつある<sup>2</sup>。笹島（2020）はCLIL教育の基本は、「言語が学びにつながり、内容の学びのために言葉があり、学びを通して思考する」ということだ、と述べている。これらを踏まえ、本稿では、CLILの主たる特徴は、Content（学習内容）の理解に重きを置くこと、Communication（言語知識・言語使用）能力の向上を図ること、Cognition（学習者の思考）に焦点を当てること、Culture（異文化理解）の意識を高めること、とする。なお、最近では4つ目のCはCommunity/Culture（協学／異文化理解）とされることが多い<sup>3</sup>ため、本稿においても、4つ目のCは、以下Community/Culture（協学／異文化理解）を使用する。

奥野（2018）は、言語教育における「内容思考型授業」の有効性を示し、学習者が社会的・文化的文脈の中で言語を使用する重要性を論じており、CLILは学習者の文化理解や思考力を促す統合学習モデルとして有効であると考えられる。

しかし、CLIL研究の多くは、英語教育や教科教育が中心である。また、実技科目・伝統文化科目の中でCLILを取り入れた実践報告は限定的である。濱本ほか（2020）が小学校の体育においてCLILを取り入れ、動作とことばが連動し、感情や感嘆詞の自然な使用を促す効果を

示しているが、英語教育、かつ限られた1回の授業にとどまった例となっている。とはいえ、身体活動と語学学習の親和性が指摘されており、実技を通じた語学学習は有効であると言える。また、伊藤（2019）は、小学校で日本の伝統文化・伝統工芸を英語で教えるCLIL授業について報告しており、児童が自国の文化、芸術の重要性を認識し、それを外国に伝えるための英語力を身に付けるための授業の大切さを改めて認識した、と述べている。伝統文化をCLILのテーマとしている点で非常に興味深いのが、児童の目標言語である英語の使用は一部に限られており、日本語教育の現場では、授業は一般的に目標言語である日本語で全て行われるのと状況が異なる。しかし、伝統文化と語学学習の組み合わせは、親和性が高いことがうかがえる。

### 2.1.2 言語と文化の不可分性

言語教育と文化教育の不可分性については、長らく多くの研究で指摘され、Kramersch（1993）は、言語は単なるコミュニケーションの道具ではなく、文化や価値観と密接に結びついており、言語教育において文化的文脈を切り離すことはできないとしている。また、日本語教育の文脈では、奥野（2018）が内容と文化を統合する授業デザインの重要性を強調している。CLILにおいてもCulture（文化）は、4つのCの一つに位置付けられており、言語教育において、文化的要素を取り入れることの重要性を示している。

### 2.1.3 実技を通じた文化理解と体験学習理論

Kolb（1984）の体験学習理論では、学習を「具体的経験（Concrete Experience）」「省察的観察（Reflective Observation）」「抽象的概念化（Abstract Conceptualization）」「能動的実験（Active Experimentation）」という4段階のサイクルとして捉えている。この理論は実技科目を通じた文化理解を支える枠組みとして応用可能であると考えられる。日本舞踊の授業では、学生は踊りを体験し、それを振り返り、踊りの意味や動き・文化的な意味を概念化し、再び踊りに活かすという循環的な学習が可能である。森川・須永（2019）は、伝統文化の体験学習は、文化理解および日本語学習の過程において、その機会が設けられることは意義あることだとしている。体験学習は単なる言語的知識理解とは異なる形で文化理解を促すと考えられる。

## 2.2 本研究の目的と意義

本研究の目的は、実技科目（日本舞踊）にCLILの視点を導入し、その教育的効果を明らかにすることにある。

日本舞踊は身体活動を通して、日本の伝統文化を体感できることから異文化理解に有効であると考えられるが、それだけでは語学学習には直結しにくい。そこで本研究では、踊る曲のテーマに関連したCLIL的活動を計画的に授業に組み込むことで、日本語学習の効果も同時に期待できると考えた。CLILは「言語」と「内容」そして「文化」を統合する教育アプローチであり、体験学習理論とも親和性が高いと思われる。しかし、日本語教育分野での実技科目に

におけるCLIL実践の実証研究は依然少ない。その意味で本研究はCLILの理論を実技科目に取り入れるという点で、従来の日本語教育研究に新しい視座を提供する意義あるものであると考える。また、日本舞踊を通じて文化的理解を促し、同時に理解したことを日本語で表現するという言語活動につなげる点は、体験→省察→言語化→再実践という学習循環を形成し、語学教育における新たな教育モデルとなりうる。

以下、第3章ではまず、実技科目においてどのようにCLIL的要素を取り入れたかを具体的に紹介する。実技を主とする日本舞踊と日本語学習を主とするCLIL的活動をどのように連携、融合させたか、詳細を説明する。第4章では、今回の活動が、文化理解と日本語運用能力においてどのような効果があったか、学生のアンケート結果から考察する。アンケート調査は、コース全体を通して見られた効果とCLIL的活動の教育的効果（語学的側面と文化理解的側面）の2つの面から考察する。

### 3. 研究方法

#### 3.1 対象クラス概要

本研究は2024年度S1、S2学期（4月～7月）に筆者が担当した留学生別科科目「日本文化演習」という科目において行ったものである。

##### 3.1.1 対象学生

「日本文化演習」科目を履修した学生は、留学生別科の学生10名であった。10名の内訳はA2クラス4名、B1クラス6名の合同クラスであった。以下の表1に詳細を示す。なお、A2、B1とはCEFRの考え方に基づいた本学のクラス名であり、A2はJLPT（日本語能力試験）のN4を目指す初級後半、B1はJLPTのN3を目指す初中級～中級前半のクラスとなっている。

表1 活動参加学生の内訳

クラス	学生の出身	人数
A2	カンボジア・スリランカ	4名
B1	中国・韓国・スリランカ	6名
合計		10名

(筆者作成)

##### 3.1.2 科目概要

対象科目である「日本文化演習」は、週1コマ（105分）の科目であり、S1学期とS2学期ともに各7週となっている。

〈授業目標及びテーマ〉

多文化共生社会の一員として生き、その国を理解するには、その国の文化を学ぶことが、友

好交流の近道の一つである。日本の音楽で踊る日本舞踊を通じて、日本文化を学び、理解を深める。(本学シラバスより抜粋)

(授業概要)

- ・日本舞踊に関連する所作や意味を学ぶ。
- ・日本舞踊を学びながら、座学ではない形で聴解力・言葉の意味理解といった面から日本語力を身に付ける。(本学シラバスより抜粋)

### 3.1.3 授業の実施内容

この授業の受講者は全員留学生であり、日本舞踊はもちろん着物を着ることも初めてという学生ばかりであった。クラスの目標は踊りを上手く踊るということではなく、体験を通して、伝統的な日本文化を知り、踊りや所作に込められた文化的意味を理解することに重点をおいている。そこに、日本語学習という要素を明確にするため、文化的学習内容と統合したCLIL的活動を組み込んだ。

CLILで扱う内容は、日本舞踊の曲として使用する「ふじの山」<sup>4</sup>、つまり「富士山」とした。以下の表2及び表3は各授業の主な活動内容をまとめたものである。「日本舞踊の活動」とは、舞踊を主とする身体性を伴う体験的活動及びそれに付随する活動であり、「CLIL的活動」は内容及び語学学習を主とした活動である。活動の時間の配分は一律ではなく、105分の中でその

表2 S1学期の授業内容

週	日本舞踊の活動	活動形態	CLIL的活動	活動形態
1	・日本舞踊概要 ・「ふじの山」の曲紹介	全体	・「ふじの山」歌詞理解 ・富士山について調べる	個人 ペア
2	・着物の小物名称確認 ・着物の貸し出し	全体	・富士山の写真を使い簡単な紹介発表 ・世界遺産をテーマにマッピング	ペア グループ
3	・着物の着付け ・挨拶のしかた ・「ふじの山」踊り	全体		
4	・挨拶のしかた ・「ふじの山」踊り	全体	・世界遺産マッピングの発表	グループ
5	・「ふじの山」踊り ・創作(一部振り付け)	全体 ペア		
6	・着物について学ぶ ・「ふじの山」踊り	全体	・自国の民族衣装と比較	個人
7	まとめ ・「ふじの山」前半発表	ペア	・自国の民族衣装の発表	個人

(筆者作成)

表3 S2学期の授業内容

週	日本舞踊の活動	活動形態	CLIL的活動	活動形態
1			<ul style="list-style-type: none"> <li>世界遺産富士山について学ぶ</li> <li>世界遺産概要</li> <li>世界遺産について調べる</li> </ul>	全体 ペア・個人
2			<ul style="list-style-type: none"> <li>富士山のSDGsについて</li> <li>選んだ世界遺産について調べる</li> </ul>	ペア・個人
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>「ふじの山」踊り</li> <li>創作（一部振り付け）</li> </ul>	全体 ペア		
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>「ふじの山」踊り</li> </ul>	全体		
5			<ul style="list-style-type: none"> <li>世界遺産×SDGsを考える</li> <li>発表用ポスターとシート作成</li> </ul>	ペア・個人
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>「ふじの山」踊り (発表リハーサル)</li> </ul>	全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>「世界遺産×SDGs」 (発表予行練習)</li> </ul>	ペア・個人
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表会</li> <li>舞踊「ふじの山」</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>ポスター発表</li> <li>「世界遺産×SDGs」</li> </ul>	ペア・個人

(筆者作成)

日の内容に応じ比重を決め行った。1コマの中で両方の活動を行った日もあれば、どちらかの活動だけを行った日もある。

### 3.2 CLIL的活動の進め方と4つのC

#### 3.2.1 学期全体におけるCLIL的活動の流れ

まず、日本舞踊を学ぶクラスにおいて、どのようにCLILの視点を導入し、活動を行ったか詳細を紹介する。前半の7週（S1）と後半の7週（S2）を合わせた全14週を、以下の表4で示すように3つのステップに分けることができる。第1ステップはS1学期、特に前半時期の活動にあたり、だれもが知る「富士山」をより具体的に、また日本人にとって富士山がどのような存在かを知ることが目的となっている。第1ステップで富士山を具体的に理解することで、舞踊における「ふじの山」での振りの理解につなげることも目指している。尚、S1学期後半の活動は、本研究の根幹的な活動からは外れるため説明を割愛させていただく。

第2ステップは、S2学期の前半時期の活動にあたり、富士山を世界遺産としての側面から見、その状況を知ることが目的としている。第1ステップよりも富士山を社会的な観点から観察し、富士山を足掛かりとして他の世界遺産にも目を向けることを目指している。

第3ステップは、S2学期後半時期の活動であり、ペアないし個人で選んだ世界遺産を例に挙げ、世界遺産の持続可能性を考え、それを発表という形で、説明することを目的にしている。第1・第2ステップよりも、広い視野で考え、多様な視点を持つことを意識させるような内容になっている。

以上のように、14週を通し徐々に、具体的から抽象的、日本から地球規模、理解から応用・分析へと移行できるよう授業のデザインを行った。

表4 学期全体におけるCLIL的活動の流れ

	目的	活動内容
第1ステップ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・富士山の基本情報を知る</li> <li>・日本人にとって富士山がどのような存在か知る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ふじの山」の曲を聴く</li> <li>・富士山についてペアで調べる</li> <li>・富士山の魅力を発表する</li> </ul>
第2ステップ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界遺産の基本情報を知る</li> <li>・世界遺産になった富士山の現状を知る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・富士山に関する説明を聞き、理解したことを全体で確認する</li> <li>・世界遺産について考えたことをペアで話し合う</li> </ul>
第3ステップ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界遺産になることのプラス面とマイナス面を説明する</li> <li>・世界遺産とSDGsについて考えを述べる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・選んだ世界遺産について調べ、個人で考える、またペアで意見を出し合う</li> <li>・意見を文章にし、ポスターの形にまとめる</li> <li>・発表と質疑応答</li> </ul>

(筆者作成)

### 3.2.2 活動における4つのC

以下の表5は、各ステップにおいて、どのように4つのCを取り入れたかまとめたものである。

1つ目のContent（内容）に関しては、上記で述べたように身近で具体的な内容から、抽象的社会的な内容へという流れを意識している。また、CLILでは「内容」を「宣言的知識」と「手続き的知識」に分けて考える<sup>5</sup>。いわゆる「わかる」知識と「できる」知識とされているが、第1ステップでは、富士山について知る、富士山を紹介する言語的知識を習得するということが中心であり「宣言的知識」の獲得が主となる。第2から第3ステップにかけ、徐々に富士山と世界遺産の関係や世界遺産のあり方を考え発表するための「手続き的知識」の獲得へと移行する。

2つ目は、Communication（言語知識・言語使用）であるが、内容を理解し、理解したことを産出するための言語知識の学習は、すべてのステップにおいて行われている。例えば、「ふじの山」の歌詞を理解するための語彙学習、「世界遺産の良否」を文章化するための言語知識や「世界遺産とSDGs」について発表するための語彙や表現を学ぶなどである。また、言語スキルの学習は、富士山や世界遺産について調べ情報収集する、情報や考えをポスターという形にまとめる、多くの人の前で発表する、質疑応答を行うといった場面に見られる。以上のように、「日本語を学ぶ」ではなく「日本語“で”学ぶ」というCLILの教育アプローチは活動全体を通して実施されている。

3つ目のCognition（思考）は、この活動において特に重視し、意識的に取り入れた。富士山に関する基本的情報を知り、魅力を理解する低次思考力LOTSから始まり、富士山が世界遺産になったことでどのような問題が起きているか、現状を知ると同時にその原因は何かを探る受容・応用の思考へと進む。その後、富士山だけでなく他の世界遺産にも目を向け社会問題としての気づきや世界遺産の良否について考えを深めるといった分析の思考へつながる。さらに、持続可能な世界遺産とはどのようなものか、そのためにできることは何か、自らができることは何かも含め思考する、評価・創造といった高次思考力（HOTS）を用いた活動となることを意識して授業で

ザインを行った。

4つ目のCommunity/Culture（協学／異文化理解）における協学は、ペアで調べる、意見交換をする、発表する、グループでマッピングする、発表の際に質疑応答を行う、などが協学の活動に当たる。異文化理解は、二つの側面から理解が進んだと考えられる。一つ目は、ペアワークやグループワークなどの協働作業により、クラスメートから自分とは違う考えや価値観を学ぶ異文化理解である。この科目は日本語レベルの異なる2クラスが合同で行う科目であったため、日頃は別々に授業を受けている学生が互いに交流する異文化理解の機会にもなったと考えられる。二つ目は狭義の意味での地域や国の異なる文化理解である。まず、富士山を通して日本の文化や自然観の理解を深め、「世界遺産×SDGs」の発表を通して取り上げた国々の文化理解を深めた。

表5 各ステップにおける主な4つのC

step	Content (内容)	Communication (言語知識・言語使用)	Cognition (思考)	Community/Culture (協学／異文化理解)
第1	・富士山を知る	・歌詞を聞く ・富士山を表す語彙 ・富士山の魅力発表	・富士山の魅力は何か考える	・ペアで調べ話す ・日本人にとっての富士山を知る
第2	・世界遺産を知る ・世界遺産としての富士山を知る	・説明を聞き理解できたことを話す ・世界遺産の良否を文章にする	・世界遺産の良否とその原因理由を考える	・グループ活動（マッピング） ・ペアで話し合う
第3	・世界遺産とSDGsについて考える	・調べてまとめる ・ポスター作成 ・発表 ・質疑応答	・世界遺産の持続可能性のために個人・政府、各レベルでできることを考える	・ペアで練習・発表 ・様々な国の世界遺産の状況を知る ・聞き手と議論

(筆者作成)

### 3.2.3 活動のためのスキヤフォールディング

CLILではスキヤフォールディング<sup>6</sup>が大事であるが、今回の対象クラスのように日本語力が初級～初中級レベルでは、特に重要になる。日本語教育分野においてCLILを取り入れた実践研究は中級レベル以上が多く、初級・初中級レベルの研究は限られている。というのも初級・初中級レベルの言語運用能力では、社会的な内容や専門的な内容は難しく、扱える内容や活動が限られると思われがちだからである。しかし、本城・小野里（2025）では、初級から初中級レベルのクラスでも学習効果があり、学生は語学学習の効果を感じていることが明らかになった。ただし、それには適切なスキヤフォールディングが欠かせない。今回の活動において行った主なスキヤフォールディングは、以下の4つである。

- ①テーマに関する説明は、写真などの視覚的なものを多く使用する
- ②調べる項目、話し合うポイントをある程度細かく指定しておく
- ③発表の際に使用する、基本的な発表表現を記載したシートを与える
- ④ポスター発表のためのポスターのひな形を教師が作成し、記載項目を指定する

その他、協学／異文化理解の効果を上げるため、レベルの異なるクラスの学生、出身地の異なる学生同士がペアになるよう、教師がコントロールを行った。また、世界遺産を選ぶ際は、「自然遺産」「文化遺産（遺跡）」「文化遺産（建物）」「文化遺産（景観）」「無形文化遺産」と、カテゴリーを指定し、ペアごとに分担させた。カテゴリーを分けることで、さまざまな視点から、世界遺産の持続可能性を考えることができるようにし、各カテゴリーに合わせた語彙や表現の紹介も加えた。

## 4. アンケート調査

### 4.1 調査方法と内容

アンケート調査は、授業最終日となる14回目の授業において行った。14回目は日本舞踊活動の集大成として「ふじの山」の踊りの披露とCLIL的活動のまとめとしてポスター発表を行った。当日は、留学生別科関係の教職員にも発表を見てもらい質疑応答に参加してもらった。発表後、全体の振り返りも兼ねてアンケート調査を実施した。アンケートは無記名の選択式、学生の日本語レベルを考え、シンプルな質問形式にした。この授業全体に関する質問が4つ、CLIL的活動の「世界遺産×SDGs」の発表についての質問が5つである。参加者10名のうち9名から回答を得ることができた。

### 4.2 アンケート調査結果

表6 授業全体に関する質問と回答

単位：人

質問1 このクラスは日本文化を知るのに役に立ちましたか。		
はい	いいえ	すこし
9	0	0
質問2 このクラスは、日本語の勉強の役に立ちましたか。		
はい	いいえ	すこし
9	0	0
質問3 日本語の勉強で役に立ったのはどんなことですか。(複数選択可)		
新しい単語を知る	新しい文法を知る	漢字を覚える
9	6	4
聞く練習になる	話す練習になる	書く練習になる
6	4	4
日本語で考える	その他	
6	0	
質問4 このクラスでチャンスがあったらしたいこと・したらいと思うことがありますか。(複数選択可)		
1人で踊る	自分の国の踊りを紹介する	自分で踊りを作る(創作)
3	4	3

(筆者作成)

表6はこの授業全体に関する質問項目4つに関する回答である。まず、質問1及び質問2では、日本文化の視点からも日本語学習の視点からも9名全員が役に立ったと答えており、この授業の目標を達成することができたと言えるだろう。

次に、日本語学習の面から、学生がどの分野の役に立ったと感じているか調べたのが、質問3である。結果は、「新しい単語を知る」が一番多くなっており、回答者全員が選んでいる。日本舞踊に関連する語彙をはじめ、歌詞による富士山の表現など、日頃は接することがない日本文化的な語彙を学ぶ機会が多かったことがこの結果につながったと考えられる。さらに、CLIL的活動においては、内容を理解し産出するための語彙が普段の日本語学習では未習のものが多かったこと、これも「新しい単語を知る」が選ばれた大きな理由の一つであろう。次に多かったのは「新しい文法を知る」「聞く練習になる」「日本語で考える」の3つで6名となっている。「新しい文法を知る」に関しては、「新しい単語を知る」と同様の理由によるものだと考えられる。「聞く練習」は、舞踊活動における教師の指示、クラスメートとの協働活動、発表での質疑応答など、聞く力が必要とされる場面が多かったことから想定内の結果であった。「日本語で考える」も6名の学生が選んでいる。これはCLILのCognition（思考）につながる回答だと言え、注目すべき点であると考えられる。

最後に、質問4は、今後の授業の参考にするため入れた質問であるが、「自分の国の踊りを紹介する」が、わずかであるが一番多くなっている。異文化体験により、自分の国の踊りを意識する機会になったことを表す結果と言えるのではないだろうか。

表7 CLIL的活動の発表に関する質問と回答

単位：人

質問1 日本語の勉強になったと思いますか。		
はい	いいえ	すこし
9	0	0
質問2 新しい知識を身に付けることができましたか。		
はい	いいえ	すこし
9	0	0
質問3 教えてもらうだけでなく、自分で考えることもしましたか。		
はい	いいえ	すこし
9	0	0
質問4 クラスメートと協力したり、交流することができましたか。		
はい	いいえ	すこし
6	0	1
質問5 おどり「ふじの山」の理解に役に立ったと思いますか。		
はい	いいえ	すこし
8	0	1

(筆者作成)

表7は「世界遺産×SDGs」のポスター発表の活動についての質問の回答である。質問4は未回答の学生がいたため、合計が9になっていない。この結果において注目すべき点は、まず質問3の「自分で考えることもしましたか」という質問に対し、9名全員が「はい」を選んで

いることである。CLILにおける4つのCの中のCognition（思考）がうまく機能したことを表していると言える。次に、質問4の「クラスメートと協力したり、交流することができましたか。」という質問に対しては、9名中6名が「はい」と回答しており、Community（協学）がある程度意識されていたことがわかる。質問5の結果は、Culture（異文化理解）につながるものであり、9名中8名が今回のCLIL的活動が「おどり「ふじの山」の理解に役に立ったと思う」と回答している。この結果は、CLIL的活動が、本来の日本舞踊という実技科目における日本文化理解の一助となっていることを表すものである。ただし、質問4と5においては、「はい」ではなく「すこし」を選んでいる学生も若干名おり、さらなる工夫、改善の余地があることもわかった。

以上の結果は、限られた人数での調査結果ではあるが、実技科目において内容言語統合型学習が可能であり、かつ有効であることを示している、と言える。また、本来の実技科目である日本舞踊活動にもプラスの影響を与えており、循環的学習の可能性が見てとれる。

### 4.3 考察

本研究の結果から、まず日本舞踊という実技科目においてCLILの視点を取り入れた活動を行うことは可能であり、文化理解、語学学習双方において一定の効果があることが明らかになった。まず、文化理解面においては、このような実技による体験学習と言語化活動を組み合わせた学習は、単なる文化体験イベントとは異なり、「知る」から「思考」へとつながり、より深い文化的理解を促すと考えられる。次に、語学学習の面においては、日本舞踊の演目をテーマにすることで、内容の理解導入がスムーズに進むと同時に、コミュニケーション能力向上のための言語知識・言語使用の面においても、有効であることがアンケート結果より明らかになった。CLIL的活動と体験的活動である実技を並行して行うことで、文化理解と語学学習が循環的に相乗効果を生んでいると考えられる。

以上のことから、本研究の実践は、CLILの理論的枠組みに整合しながら、実技科目という新しい分野での有効性を示したと言える。

## 5. まとめと今後の課題

本研究は、日本舞踊という実技科目にCLIL（内容言語統合型学習）の視点を導入し、本活動が、学習者の日本語運用力の向上と文化理解の深化を促す効果があることを検証した。日本舞踊という伝統文化を実技だけに重点をおいて学ぶのではなく、内容言語統合型のCLIL的活動を組み込むことは、日本文化理解に効果的であることがわかった。同時に、学習者は日本文化を身体的に体験しながら、体験や関連する内容を日本語で表現することにより、「理解した文化を言語化する力」「語彙の定着」「コミュニケーション力の向上」を感じていることが、アンケート調査の結果から明らかになった。また、体験→省察→言語化→再実践という体験学習

のサイクルが、深い文化理解につながっていることも見えてきた。これらの結果は、実技を通じたCLIL授業が、語学学習と文化理解の双方に効果的であり、相乗効果の期待できるアプローチであることを示していると言えるだろう。ただし、今回のアンケート調査は、特定のクラスにおける9名という限られたサンプル数の中での結果であること、また、留学生にとって日本舞踊は、他の日本語学習科目に比べ「新奇性」が高いため、アンケート調査において肯定的な回答につながった可能性が否定できないことも考慮する必要があることを付け加えておく。

今後の課題は4つある。第1に、上記で触れたように、今回の研究は、特定のクラスを対象に行ったアンケート調査結果をもとにしているため、サンプル数が少ないことである。今後、複数学期にわたり縦断的に調査を実施し、サンプル数を確保する必要がある。

第2にアンケート項目内容、学習成果の評価方法の精査が必要である。今回、アンケートの質問項目は、学生の日本語レベルを考慮し、学生が理解しやすいシンプルな質問にした。そのため、学生の意識変化・言語能力の変化を詳細に捉えることができていない。CLIL的活動が文化理解、言語能力にどのような影響を与えたかをより具体的に把握するためには、学習者の発話分析や語彙使用の変化、文化理解度の確認テストなどを取り入れることも有意義だと考える。また、体験学習のサイクルが具体的にどのような効果として表れているか、ということについての調査も行っていきたい。

第3に、他の実技科目への適用可能性を検証する必要がある。体験学習を主とする日本伝統文化として、例えば、茶道や華道、書道、武道といった伝統文化の実技科目において、CLIL的活動を取り入れ、その相乗効果を日本舞踊と比較することで検証が可能であると考えられる。

最後に、今回のように伝統文化の実技科目においてCLIL的活動を導入する場合、実技と日本語教育の双方の専門性が求められるため、実践が容易ではないことが挙げられる。そこで、それぞれの専門の教員がティームティーチングで取り組めるような枠組みを作ることが必要となる。その枠組みを構築することで、実技を通じた内容言語統合型学習、つまり文化体験型CLILは可能となり、日本語教育における新たな学習モデルとなることが期待できる。

## 【注】

1. 文部科学省「日本人学生の海外留学状況」及び「外国人留学生の在籍状況調査」について 参照
2. 日本CLIL教育学会HP「CLILとは」 参照
3. 日本語教育分野で広く読まれている奥野由紀子（2018）「日本語教師のためのCLIL入門」凡人社において、4つ目のCはCommunity/Cultureとしている。
4. 日本の童謡「ふじの山」
5. 池田他（2016）「CLIL内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たなる挑戦 第3巻 授業と教材」上智大学出版 参照
6. 学習者が自力では達成が難しい課題、特に言語的に難しい場合にサポートすることを指し、

Scaffolding「足場かけ」とも言われる。奥野由紀子（2018）「日本語教師のためのCLIL入門」凡人社 参照

## 【参考文献】

文部科学省（2025年4月30日報道発表）「日本人学生の海外留学状況」及び「外国人留学生の在籍状況調査」について

[https://www.mext.go.jp/content/20250430-mxt\\_kotokoku02-000027891\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20250430-mxt_kotokoku02-000027891_1.pdf)（2025-10-26閲覧）

伊藤由紀子（2019）「日本の伝統文化・伝統工芸を取り入れたCLIL授業の提案」中部地区英語教育学会『中部地区英語教育学会紀要』48, 113-120

奥野由紀子（2018）「日本語教師のためのCLIL入門」凡人社

笹島茂（2020）「教育としてのCLIL」三修社

日本CLIL教育学会HP「CLILとは」<https://www.j-clil.com/clil>（2025-10-26閲覧）

濱本想子・吉村一彦・松田恵美（2020）「小学校におけるCLIL体育の授業実践に関する事例研究－『跳び箱運動×感嘆詞』の内容的視点から－」『日本教科教育学会誌』43(1), 45-56

細川英雄（2008）「相互文化性と対話のダイナミズム－ことばと文化の統合のために」第十回フランス日本語教育シンポジウム

本城美和子・小野里恵（2025）「CLILを取り入れたポスター活動からの学び－初中級クラスでのアンケート調査結果を中心に－」韓国日本語學會 第52回 国際學術發表大會

森川結花・永須実香（2019）「日本の伝統文化体験から得られる学習者の気づきと教師の役割」CAJLE 発表資料

Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). CLIL: Content and Language Integrated Learning. Cambridge University Press.

Kolb, D. (1984). Experiential learning experience as the source of learning and development. Prentice Hall, Inc

Kramsch, Claire. (1993). Context and culture in language teaching. Oxford University Press.

# Aiming for Synergistic Effects in Japanese Cultural Understanding and Language Learning Through Practical Activities: Practical Implementation of CLIL in Japanese Dance Courses

Miwako Honjo

## Abstract

This study is a practical investigation that introduced a CLIL (Content and Language Integrated Learning) perspective into a practical Japanese dance course to verify the synergistic effects on cultural understanding and Japanese language learning. The subjects were 10 international students studying Japanese in a preparatory program for international students. The lesson design was based on the four Cs: Content, Communication, Cognition, and Community/Culture. Survey results confirmed acquisition of vocabulary and expressions, improved critical thinking skills, enhanced communication abilities, and deepened cross-cultural understanding. Learners deepened their understanding of Japanese culture through experience while also developing their Japanese language proficiency. This initiative demonstrated that CLIL educational theory can function effectively even in practical arts courses. This paper presents new possibilities for Japanese language education through experiential cultural learning.

**Keywords:** Practical Skills Subjects and CLIL, Japanese Dance, Content and Language Integrated Learning, Experiential Learning, Cross-Cultural Understanding